

2024年4月14日（日）主日朝礼拝説教

『二人の目は開き』井上隆晶牧師

Ⅱコリント3章14～18節、ルカによる福音書24章13～35節

①【何度でも聖書を朗読すること】

イエス様が復活した日曜日に、クレオパとルカという二人の弟子がエマオという村に向かって旅をしていました。エマオはエルサレムから西へ約11キロ離れた村です。彼らはエルサレムと兄弟たちの群れを後にし、歩きながら議論していました。ガエタノ・ピッコロという人がこの個所についてこう書いています。

●落胆した時にまず頭に浮かぶのは「逃げる」ことです。ある状況、ある関わり、ある責任から「逃げ出したい」と思います。落胆には怒りが含まれていることがたびたびあります。…福音のこのくだりでも同じことが起こっています。落胆し疲れてしまった二人の弟子は帰路に着くことにします。…落胆し怒っている時には、犯人捜しをしたり、意味や理由を見つけようとして…いらだちます。この個所の二人の弟子は私たちのようです。

私達も同じようにすべてを放り出してどこかへ行きたいと思う時があります。エマオは、旧約続編Ⅰマカバイ記4章3節で神が現れ奇跡を行った場所です。エマオではなくアマウスと書かれています。今では実際にどこであったのか特定することはできません。ルカはこの二人の弟子が、苦しむキリストとは違う、栄光に満ちたキリストのイメージを求めていることを暗示したかったのかもしれませんが、そこへイエス様が旅人の姿で近寄ってきて彼らと一緒に歩き始めたのですが、彼らの目は遮られていてイエス様だとは分かりません。イエス様は「歩きながらやり取りしているその話は何のことですか」（17節）と聞くと、二人は暗い顔をして立ち止まり、イエス様が殺されてしまったこと、墓に遺体がなかったこと、天使が現れ「イエス様は生きている」と言ったことなどを話しました。復活したイエス様が目の前にいるのに彼らは暗い顔をしています。天使の言葉というのは「神の言葉」です。しかし目の前にあるのは死んだキリストであり、すべてが終わったという現実です。この現実の力の前に彼らは打ちのめされたのです。この現実の前に、聖書の言葉は力なく聞こえてきます。

●先日聖公会の川口基督教会に行ってきました。そこの教会報にこんな記事が載っていました。1859年に宣教が始まり、1868年に「キリスト教禁教令撤廃令」が出され、55年後の1923年に東京と大阪で初めて日本人の主教が立てられ、これからという時に、その年の9月1日に関東大震災が起り、東京市内と横浜の大部分の教会は焼け、破壊されてしまいました。その時にマキム主教はアメリカに「全てを失った。残ったのは主にある信仰のみ」という電報を送ったそうです。

それを読んでいつの時代でも同じだなあと思いました。すべてを失うという体験を先輩のクリスチャンたちは何度もしてきました。そのような現実を前にして、

どうやって彼らは立ち直ったのでしょうか？

弟子たちにイエス様は「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」といわれ、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明され」（25～27 節）しました。「聖書全体にわたり」というのは、旧約聖書のことです。旧約聖書からメシアの受難と栄光について説明されたのです。このイエス様の説教を聞いて彼らは「心が燃え」（ルカ 24：32）しました。彼らの聖書の読み方が間違っていたという事です。結局、イエス様に教えてもらわなければ人間は聖書を理解することはできないのです。詩編 71：17 に「神よ、私の若い時から、あなたご自身が常に教えて下さるので、今に至るまで私は驚くべき御業を語り伝えて来ました。」と書いてある通り、神ご自身によって人は教えられます。神から出たものは神でなければ解き明かすことはできないからです。詩編 105～107 を読むと、罪を犯し続けたイスラエルを見捨てずに、忍耐強く関わる神の姿を知ることが出来ます。幸いと災いが繰り返し起こって来ますが、主語がすべて「主は」となっています。人ではなく、主がすべてを行っておられるのです。試練が与えられるのも神の計画であり、人の信仰を強くするためなのだということが分かります。立ち直る方法の第一は、何も感動しなくても、何も響いて来なくても良いのでひたすら聖書を読み続けることです。その中で神がいかに愛の深い方かが見えてくるのです。

②【聖餐によって目が開く】

やがて彼らは目的の村に着きますが、イエス様は「先へ行こうとされる様子だった」（ルカ 24：28）と書かれています。二人は「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」（29 節）と無理に引き止めました。「一緒に食事の席に着いた時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」（30～31 節）とあります。「パンを取り」「賛美の祈りを唱え」「裂き」「渡す」この四つの動作は聖餐式と同じです。説教では弟子たちの目は開きませんでした。聖餐式で彼らの目ははっきりと開きました。立ち直るために必要な二つ目のことは聖餐です。聖餐によって何が見えるのでしょうか。イエス様が見えてくるということです。ここでは弟子たちではなく客であるイエス様が夕食のパンを祝福して配っています。すなわち命を与えています。それと同じように、聖餐をいただくことで、自分で生きているのではなく、実はイエス様に生かされていたのだ、ということが分かるのです。私よりも、私の体を心配しておられるのです。私よりも私に生きて欲しいと願っておられる方がいるのです。

③【元気が出る秘訣＝キリストの熱心が人を変える】

彼らの目が開くと、イエス様の姿は見えなくなりました。見えなくなったという

ことは、もう見える必要はなくなったということです。二人は「聖書を説明して下さった時、わたしたちの心は燃えていたではないか」(32 節) と語り合い、すぐにエルサレムに引き返しました。それは彼らが再び信仰の旅を始めたことを表しています。説教と聖餐という礼拝には人生を U ターンさせる力があります。地へ落ちてゆく私たちを、天へ引き上げる力があります。

私たちが無気力になったり、心が疲れてしまう時というのは「どうせ何をやっても同じだ。やるだけばかばかしい」という思いが湧いて来たり、「私ばかりが頑張らなければならないのか、私は孤独だ」という思いが湧いてきた時だと思います。

●チェスタトンだったと思うのですが、こんなことを書いていました。「子どもは同じ遊びを何度も繰り返す。それは命が溢れているからである。命の特徴とは繰り返しを嫌がらないことにある。神は今日も私たち人類に言われる。『もう一度やろう!』」

ペトロは殉教するが怖くて、ローマにいる信者を後にして逃げ出そうとした時、その街道の先にキリストが立っておられました。ペトロは「主よ、どこへ行かれるのですか？」(クオ・バディス・ドミネ) と聞くと、主は「ローマにいる私の民のために、もう一度十字架に架かるのだ」と言われました。それを聞いて、ペトロはローマに戻って殉教したという話が伝わっています。

私たちが逃げても、キリストは決して逃げません。私たちが逃げても追いかけて来て一緒に歩かれます。私たちが諦めても、キリストは決して諦めません。私たちが責任を投げ出しても、キリストは私たちが投げ出した責任を負い続けられます。何度失敗しても、スタート地点で待っていてくださいます。今日もキリストはこの都島教会に先に来て待っていてくださいます。だからこそ私たちも『もう一度やろう!』という気持ちになれるのです。

キリストの姿を思い出しましょう。そして立ち上がりましょう。